



平成31年3月27日

スーパーサイエンスハイスクール（平成28年度指定） の中間評価について

「スーパーサイエンスハイスクール」について、平成28年度指定校の中間評価を実施しましたので、お知らせします。

1. スーパーサイエンスハイスクールの中間評価について

文部科学省では、将来の国際的な科学技術系人材の育成を図るため、科学技術・理科、数学教育に関する研究開発を行う高等学校等を「スーパーサイエンスハイスクール（以下「SSH」という）」に指定し、理科、数学等に重点を置いたカリキュラムの開発や大学等との連携による先進的な理数系教育を実施しております。このSSHの中間評価は、指定から三年目の学校について、SSH企画評価会議協力者（外部の有識者）による研究開発の進捗状況等の評価を行い、各学校が研究開発等の内容を見直す機会とし、事業の効果的な実施を図ることを目的とするものです。

2. 中間評価の結果について

平成28年度に新たに指定した24校について、SSH企画評価会議協力者による中間評価を行い、別添のとおり評価結果を取りまとめましたので公表します。

（問い合わせ先）

初等中等教育局教育課程課

課長補佐 高瀬 智美（内線2363）

係長 荻野 雅裕（内線2613）

電話：03-5253-4111（代表）

電話：03-6734-2613（直通）

○ 中間評価の結果について

- ・「優れた取組状況であり、研究開発のねらいの達成が見込まれ、更なる発展が期待される」(5校)
〈学校名〉

東京工業大学附属科学技術高等学校	石川県立小松高等学校
愛知県立刈谷高等学校	滋賀県立膳所高等学校
福岡県立香住丘高等学校	

- ・「これまでの努力を継続することによって、研究開発のねらいの達成が可能と判断される」(5校)
〈学校名〉

さいたま市立大宮北高等学校	長野県屋代高等学校・附属中学校
名古屋大学教育学部附属中・高等学校	学校法人名城大学 名城大学附属高等学校
三重県立松阪高等学校	

- ・「これまでの努力を継続することによって、研究開発のねらいの達成がおおむね可能と判断されるものの、併せて取組改善の努力も求められる」(7校)

〈学校名〉

青森県立弘前南高等学校	千葉県立木更津高等学校
千葉県立長生高等学校	石川県立金沢泉丘高等学校
長野県飯山高等学校	学校法人ノートルダム清心学園 清心中学校清心女子高等学校
大分県立日田高等学校	

- ・「研究開発のねらいを達成するには、助言等を考慮し、一層努力することが必要と判断される」(6校)
〈学校名〉

福島県立会津学鳳高等学校・附属中学校	群馬県立高崎高等学校
千葉県立柏高等学校	神奈川県立横須賀高等学校
奈良県立青翔高等学校	熊本県立熊本北高等学校

- ・「このままでは研究開発のねらいを達成することは難しいと思われるので、助言等に留意し、当初計画の変更等の対応が必要と判断される」(1校)

茨城県立水戸第二高等学校

- ・「現在までの進捗状況等に鑑み、今後の努力を待っても研究開発のねらいの達成は困難であり、スーパーサイエンスハイスクールの趣旨及び事業目的に反し、又は沿わないと思われるので、経費の大幅な減額又は指定の解除が適当と判断される」(0校)

○ 中間評価講評

1	青森県立弘前南高等学校	<p>○ 1年全生徒対象「南陵Dプラン」(1単位)、「南陵ラボ」(1単位)、「南陵ゼミ」(1単位)における青森県の科学資源を活用した課題研究は評価できる。今後、SSHコース以外の普通科生徒が1年の探究活動を発展させた2年生以降の教育課程の開発が望まれる。</p> <p>○ 生徒に探究ノートをまとめさせ、担当教師がコメントを書いて生徒と教師のコミュニケーションを取りながら「まとめる力」を育成していることは評価できる。今後は、「南陵Dプラン」などの成果を検証する評価法、指導法の開発し、併せて全ての教科科目で授業改善につなげることが望まれる。</p> <p>○ 校長のリーダーシップのもと、地元の外部講師、大学院生、留学生の協力を得ながら全教師指導体制で取り組んでおり評価できる。</p> <p>○ 弘前大学等の外部機関と連携して課題研究が進められている点は評価できる。今後は、高大接続に関する研究開発も進めていくことが望まれる。また、科学部員数の増加及び科学オリンピックへの参加者数の増加は評価できる。</p> <p>○ 様々な取組をルーブリック評価やアンケート調査を実施して成果を検証・分析しており評価できる。</p>
2	福島県立会津学鳳高等学校・附属中学校	<p>○ SSH事業について、学校全体として組織的に取り組んでいくことが望まれる。</p> <p>○ 学校選択科目「SSH産業社会」では、取組を通じて成長したと答えた生徒数が29年度には28年度より減少しており、教育内容の検討が望まれる。課題研究のテーマ設定に際して、生徒の自主性がよく発揮されており、教師の関わりが過度にならないように配慮されている点は適切であり評価できる。</p> <p>○ 外部人材は活用されていないが、SSHコースの生徒の指導に当たり、教師のより一層の指導力向上が求められ、そのための取組を積極的に実施することが望まれる。</p> <p>○ 台湾の学校との海外研修及び会津大学、短期大学との連携がなされており、効果が期待できる。</p> <p>○ SSH対象者と非対象者の比較を数値化して行っている点は評価で</p>

		きる。今後は、SSH 対象者の変容の分析も望まれる。
3	茨城県立水戸第二高等学校	<p>○ SSH 指定第3期目として掲げた研究課題「SSH サイクルや主体的・協働的な学びを活用した、科学技術を牽引できる女性の育成」のために多様な研究開発プログラムが計画され実施されているが、アンケート結果からは SSH 事業に対する教師の意識の低下が見受けられる。運営体制を維持・拡充していくためにも、その原因の究明と改善が望まれる。</p> <p>○ 目的、目標に沿った様々な事業が実施され生徒の変容について効果が見受けられるが、生徒の負担を考慮しつつ、意欲的に取り組ませることが重要である。</p> <p>○ 教師の指導力向上ための取組が、文系、理系選択科目を担当する教師双方になされており、指導体制は整えられているが、それにもかかわらず、教師の意識及び SS クラス生徒の達成感が低い現状は改善することが望まれる。</p> <p>○ 外部人材の活用プログラムにおいて、講義形式のものが多く、生徒が課題研究を実施する過程において、楽しさや難しさ、やりがい等を感じさせる取組となっていないように見受けられ改善が望まれる。</p> <p>○ SSH プログラムの成果評価方法を開発し、成果を分析することが望まれる。</p>
4	群馬県立高崎高等学校	<p>○ 校長のリーダーシップのもと、SSH 担当教員の熱意と努力によって5つの仮説・研究課題として、焦点化した開発が行われているが、教員や生徒の実態に即して進もうとするだけに、学校全体の研究開発として推進していくことが望まれる。</p> <p>○ 事業実施当初より、一部の教科から SSH の取組を進め、他の教科でも取り組んでいく計画であったとされているが、SSH の取組を学校全体のものとして効果的に生かすため、他の理数系教科へ取組を広げることが望まれる。</p> <p>○ 課題研究を行う際、OB を活用することで、研究の広がりや深化につなげようとする点は評価できるが、OB による助言を生かすための仕組みの改善が必要とされており、更なる検討が望まれる。</p> <p>○ 生徒自身が主体的に検討したテーマによる課題研究においては、教師のサポートが必要なため、多くの教師の関与が必要である。また、</p>

		<p>課題研究では、教師が指導できる分野にとどめるのではなく、幅広く対応できるよう、教師の指導力向上に向けた取組を実施することが望まれる。</p> <p>○ 部活動において各種コンテストなどへの参加がある点は評価できる。</p> <p>○ 生徒や教師の変容に関する分析が行われ、ルーブリック評価も行われており評価できる。今後は、評価結果を授業改善や探究的な学習などの広がりなどに生かすことや、目標とする成果を測定する指標や、測定法について更に検討することが望まれる。</p>
5	さいたま市立大宮北高等学校	<p>○ 全校生徒対象で実施する課題研究を教育課程に位置付け、普通科スーパーサイエンスクラス（SSC）選択生徒が29人（平成29年度）から増加していることは評価できる。今後はSSH指定校として育成を目指す人材像及び生徒に身に付けさせたい資質・能力を更に明確化すると共に、観点や枠組みを設けるなどして、計画的・客観的な指導と評価を進めることが望まれる。</p> <p>○ 課題研究の指導に関しては、探究の過程を重視し、生徒の探究意欲の向上とともに、情報収集の方法やデータの精度などを年次ごとに高めてきていることは評価できる。今後、ミニ課題研究とその成果と課題を課題研究の指導改善に役立てる評価法の開発が望まれる。</p> <p>○ 1年次の課題研究において、1クラスで指導者3人体制で行うとあるが、その体制でどのように課題研究の質を高めていくのか、教師のコンセンサスをどう構成していくのかなどを可視化し、改善に結びつけていくことが望まれる。</p> <p>○ ICT機器を活用したe-ポートフォリオの指導が積極的に実施されていることは評価できる。今後、AO入試の活用とともに課題研究の指導に役立てる活用法の開発が望まれる。</p> <p>○ 市の理数教育の拠点校として地域の小中学校への出前授業等に生徒が積極的に参加していることは評価できる。今後、そのことが生徒の変容にどのように有効かなどを検証する評価法の開発や、教育課程外の生徒の過度な活動による負担感などの検証が望まれる。</p>
6	千葉県立柏高等学校	<p>○ 普通科で2年生以降の課題研究に取り組む生徒が極めて限定的であり、SSH事業における普通科への展開を進めるとともに、教師の指導体制の強化及び更なる授業の改善などが望まれる。また「課題研究</p>

		<p>と各教科の学習成果の相互作用」に関して、整理・分析できているのが一部の教科に留まっており、今後他教科でも早急に取り組むことが望まれる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 課題研究の指導に関して、特に仮説 A の「課題設定力」について 1 年目の課題を踏まえて 2 年目の取組を工夫している様子が見受けられ評価できる。今後は、その取組が課題研究の質的向上や指導の改善・深化にどのように生かされているのかも検証することが望まれる。 ○ 様々な取組が行われているが、それらが生徒の資質・能力向上にどう関連するのかを明確化し、教師間で共通認識を図ることが望まれる。 ○ 科学系部活動の参加者が 73 名と活発に活動している点は評価できる。今後は、国際科学コンテスト等へ積極的に参加することが望まれる。 ○ 課題研究を核とした教師の指導法、評価法を開発していくことが望まれる。
7	千葉県立木更津高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 普通科 SS 科目 1 年「SS 情報」（2 単位）、「SS 保健」（1 単位）での探究的な取組を実施しているが、多くの教師が関わりにくい枠組となっており、内容の改善が望まれる。 ○ 理数科 3 年「総合的な学習の時間」に自由選択として位置付けられている「探究 KISARAZU-Ⅲ」の選択者数に課題があることから、取組自体の評価及び検証が望まれる。また、1 年、2 年の課題研究の指導の在り方を再検討することが望まれる。 ○ 全教科の教師が関わるように指導体制を構築していくことが望まれる。そのためにも教師全体に事業の目的・目標を共有していくことが望まれる。 ○ 運営指導委員と教師とのワークショップなどの取組が行われていることは独創性があり評価できる。 ○ 海外研修について、参加した生徒が多くの成果を得て、意識も変わったことは評価できるが、その成果を参加生徒以外にも広げる工夫が望まれる。
8	千葉県立長生高等学校	

		<ul style="list-style-type: none"> ○ 総合学習テキスト「長高メソッド」や「アクティブラーニング型授業の実践と評価の試み」など指定2年間の成果と課題を冊子として発信していることは評価できる。アクティブラーニングの授業実践とその評価については、全校規模での取組となっていることは評価できる。 ○ 理数科・普通科ともに課題研究の教材等は十分整っているが、取り組む時間の確保は必ずしも十分とは言えない。科学系部活動で取り組む時間を確保しているものと見受けられるが、2年生以降の普通科の理系の生徒への配慮がなされることが望まれる。また「長高メソッド」の実践が普通科1年（1単位）にとどまり、2年以降の課題研究や探究的学習として発展が認められない。今後、「長高メソッド」の成果と課題を検証する中で発展させることが望まれる。 ○ 科学系部活動の参加生徒数が増加し、生物オリンピックにも多く参加しているなど充実している点は評価できる。 ○ 目標としている「科学的倫理観」「社会的実践力」についての具体的な評価が見られない。テキスト（長生メソッド）を通して「知識」として定着させるだけでなく、例えば生徒自身の「倫理観」や具体的な態度や行動としての「実践力」の育成を目指して、指導と評価を進展させることが望まれる。 ○ ボトルネックを見いだす評価法の開発と、学習モジュールによるアクティブ・デザイン型のカリキュラム開発については、研究・実践の途上であるが、それぞれの意義や効果は高いと感じられるため、研究段階だけで終わらせるのではなく、実践段階まで進め、残りの2年間で汎用性の高いものに仕上げることが望まれる。
9	東京工業大学附属科学技術高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 卒業生の追跡調査を実施しようとしている点は評価できる。追跡調査の方法の確立と実施・改善が望まれる。 ○ 「数理応用」始め、優れた副読本を数多く作成し、デジタル教材として発信もされている事は大変評価できる。一方で、同等の取組を展開している学校はないことから、普及・啓発の観点で普通科高校にも活用できるような積極的な情報発信が望まれる。 ○ 教師全員が連携しながらSSHに関わる指導体制が構成されており評価できる。教師の指導力向上の観点から、他のSSH校との教育交流機会を更に増やすことも望まれる。 ○ 工業科と普通科の連携による研究として、STEM教育の新しい可能

		<p>性を拓こうとしており大変評価できる。</p> <p>○ 東京工業大学への推薦入学生については、高大接続の観点から積極的な研究を進めていくことも検討することが重要である。</p>
10	神奈川県立横須賀高等学校	<p>○ 学校設定科目「Principia I～Ⅲ」において、全生徒対象に課題研究を核としていることは評価できる。一方、3年生で課題研究を選択する生徒数が少ないことについて改善が望まれる。また、「Principia I～Ⅲ」等の課題研究が全教科科目の授業改善につながる評価法の開発が望まれる。</p> <p>○ 教師の指導力向上のためのリサーチガイドを作成しているが、これには生徒の主体性を重視した系統的な指導ができていないのかといった点が明確でないように見受けられるため、指導方法や評価方法を検討しつつ、リサーチガイドを改善すること等により、生徒の主体性を生かした取組となることが望まれる。</p> <p>○ 学校設定科目「Principia I」で18の研究機関と連携することで教師の指導体制を確立させるとともに教師の資質向上に役立っていることは評価できる。全生徒が外部研究機関と連携して課題研究につなげている計画を実施してきたこと、全教科・全科目で科学的リテラシーと国際性を育成する授業を実施したことは、担当教師に相当な負担がかかってきたように見受けられるため、今後は、3年間で培われた経験によって、教師の負担を考慮しつつ、生徒がより主体的に取り組めるよう工夫することが望まれる。</p> <p>○ 成果の分析に関して、設定している5つの力（科学への理解・関心、論理的思考力、国際性、情報収集・情報処理能力、科学を応用する力）の評価が明確でないため、実践している各取組の成果についての分析・評価を5つの力との関係を明確にして整理することが望まれる。</p> <p>○ 計画された事業が、多彩に実施されているが、課題の目的を達成するために、どの事業をどのように実施することが重要であるかを学校として十分に把握しているようには見受けられない。事業が実施されている現状から、なぜSSHに取り組もうとし、それによりどのような生徒の変容を目指すのか明確化し、教師全体で共有することが望まれる。</p>
11	石川県立金沢泉丘高等学校	<p>○ 課題研究のテーマ設定の工夫や評価法の確立、時間と場所の確保など、自主的な課題研究を実施するモデルとして、他校へ普及できる</p>

		<p>よう工夫して外部に提示することが望まれる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 学校設定科目についてのテキスト作成や指導内容に工夫があり評価できる。生徒による行事運営も評価できる。一方で、生徒の質の高さに依存して、全教師が関わる主体的な取組が見えにくいいため改善が望まれる。 ○ 北陸先端科学技術大学院大学の留学生を招いて、英語による発表やディスカッションの力を伸ばす取組は評価できる。今後は企業（地元も含めて）等との連携も望まれる。従来からある物理部、化学部、生物部、アドバンスト数学部に加えて、生徒全員が加入のスーパーサイエンス部は意欲的に活動しており評価できる。 ○ ホームページでの掲載、実習、研修の生徒レポートの冊子作成などの取組が、成果の普及・継承の観点から評価できる。 ○ 4期目の現状を踏まえ今後の取組の推進にあたっては研究開発課題である「高い志」と結びついた特色ある取組を検討していくことが望まれる。
12	石川県立小松高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 理数科の外部支援「小松サポートプログラム」の組織や「一人一冊ノート」の作製、1次全科での「プレゼンテーション&ディスカッション（P&D）」等優れた取組が行われており評価できる。全校体制の課題研究により授業方法の改善、生徒の主体性・協働性の向上がみられ評価できる。 ○ 科学オリンピックの参加者は増加しており評価できる。 ○ 平成29年度のアンケート結果から生徒の課題研究へ取組む姿勢が積極的であることが読み取れ、評価できる。仮説に基づく成果や課題の分析が適切に行われているかどうかの分析は実施中であるため、今後も継続して取り組まれることが望まれる。 ○ EI（エモーショナルインテリジェンス）という主に企業で実施されるテストを教育用に開発していこうという試みはユニークであり期待できる。 ○ 普通科の課題研究用に「課題研究ノート」が開発されているが、マニュアルが主導するのではなく、普通科においてもテーマを自主的に考えさせる方向で内容を工夫することが望まれる。
13	長野県飯山高等学校	

		<ul style="list-style-type: none"> ○ 中山間地域の地域性を十分考慮した研究計画を立て、充実した理数教育環境を育もうとしている点は評価できる。今後成果を十分検証することが望まれる。 ○ 探究科における課題研究の指導法を普通科やスポーツ科学科の担当者と共有することで課題研究の取組を全校に波及させ、全校・全教科で課題研究に取り組んでいる点は評価できる。特色有る教材開発、授業改善に向けた実践研究及び教材開発も行われており、効果を検証して改善につなげていくことが望まれる。 ○ 中山間地校コンソーシアムや生徒参加コンテスト等の機会に積極的に教師を派遣して多くの先進事例に接することで教師の指導力を向上させ、指導体制を効果的に改善されることが望まれる。 ○ ルーブリックによる評価結果だけでなく、例えば運営指導委員会の意見も加味することで学校全体の取組に更なる改善が図られることが望まれる。 ○ 行事についてのアンケートの中で SSH の年次進行に伴って「研究者などを身近に感じていない」という結果があり、きちんと分析し、改善につなげることが望まれる。また、学校改変という状況の中で非常に良く取り組まれている。改善点をしっかりと検討して新しい SSH の形を作ることが望まれる。
14	長野県屋代高等学校・附属中学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 中高全体で研究計画がしっかりと実施されており、外部有識者の指導・助言事項を踏まえ着実に事業改善が図られており評価できる。新しく転入した教師に SSH の取組をレクチャーし、継続が円滑になっていることも評価できる。 ○ 外部人材活用がより有効に機能するよう、事前・事後学習や授業内容、教科横断的授業など工夫が望まれる。またキャリア教育や進路指導における卒業生との交流は、効果・方法ともに客観的評価可能な仕組みを検討することが望まれる。 ○ 科学系部活動や理数科全員の科学オリンピック参加、それらを支援する仕組みは評価できる。海外との交流については、生徒全体に占める参加者の割合は小さく、全生徒の国際性の向上につながる仕組みの検討・充実が望まれる。 ○ 通常の授業において生徒が主体的に取り組む場面を意識して取り組んでいる点は評価できる。

		<p>○ 同窓会等を通して SSH の生徒の追跡調査の活用も図られているが、さらに、追跡調査法の検討、結果の分析を進め有効な活用法を確立することが望まれる。</p>
15	名古屋大学教育学部附属 中・高等学校	<p>○ 事業の多くが教師主体で行われていて生徒の主体性を生かした取組が少ないように見受けられるため、目的に掲げたイノベーションにつながる能力を育成する事業を実現するために生徒の主体性をより重視していく方向性を検討していくことが望まれる。</p> <p>○ 高校からの入学生徒と中学から内部進学した生徒とを組み入れて「協同的探究学習」を取り入れた課題研究を実施することで、両者の差が少なくなるように工夫して指導できている点は評価できる。</p> <p>○ 課題解決力を上げるような取組は効果的に実施されているが、真に新しい問題を発見する力を育成するような取組が十分ではないように見受けられる。設定された目的に合致している事業となるよう更なる改善が望まれる。</p> <p>○ 教師の優れた協力体制のもと SSH 事業に関わっている点は評価できる。また、生徒研究員制度に所属する生徒数の増加は評価できる。</p>
16	愛知県立刈谷高等学校	<p>○ 研究目的に掲げた自律的に学ぶ力やグローバルリーダーの育成に向けて適切に事業が実施され、生徒の変容において高い成果をあげており大変評価できる。</p> <p>○ 課題研究を事業の中心に適切に据え、その中で生徒が主体的に学ぶ力をつけることに成功していること、通常の教科授業においても生徒の主体性を育むための取組が適切に進められていることは評価できる。</p> <p>○ 課題研究のテーマ設定を生徒主体に丁寧に進めている。各個人がテーマを考えてから、グループでのテーマ決定に至る過程がよく工夫されており、評価できる。教師が主導するのではなく、生徒を支援するという意識が教師間で共有されており、それが事業目的の達成に適切に作用しているように見受けられる点も評価できる。</p> <p>○ 1～3学年に、英語で学ぶ力や、英語プレゼンテーションを自律的に作成する力、質疑応答にも耐えうる実戦的な英語力の育成を目指す内容の「Science & Presentation」が設定され、学びの成果を試す機会（外国人研究者の講演や海外研修等）も設定されるなど、英語能力の育成が図られており評価できる。</p>

		<p>○ 海外研修などについて、実際に参加する以外の生徒も交流できるような仕組みを検討することが望まれる。</p>
17	学校法人名城大学 名城大学附属高等学校	<p>○ 名城大学教員による取組の前後で、国語科、数学科、理科などの教師が生徒に対して適切にフォローアップしており、より効果的になるように工夫していることは評価できる。</p> <p>○ 全校体制の下、組織的に事業を推進していることや、計画時に課題としていた各項目について、着実に取り組まれていることは評価できる。また、どのような生徒を育てたいかが明確になっており、それに向けた一つ一つの取組が有機的につながっており大変評価できる。</p> <p>○ 全校生徒を対象にした取組である「サロン」については、数学や科学について自由に疑問や意見を述べ合う興味深い取組であり、数学や科学への生徒の意識を高めるなどの効果が期待でき、評価できる。成果物として「続・サロンのすすめ」を発行している点も評価できる。</p> <p>○ 指定当初から開催している「SSH 東海フェスタ」について、内容・規模共に拡大・充実しており評価できる。</p> <p>○ SSH 対象生徒が名城大学農学部へ進学した場合、大学1年生から研究室に所属させるというのは高大接続に関する画期的な取組であり評価できる。今後、高校からの課題研究の継続、メンターとして卒業生の高校への派遣、研究室所属に関して他の学部への横展開拡大などについて検討していくことが望まれる。</p>
18	三重県立松阪高等学校	<p>○ 研究する時間が十分に取れないという生徒の声に応じた改善が必要である。</p> <p>○ 全ての教師が課題研究に携わることで教師相互の連携体制が向上しており、学校全体で組織的に課題研究に取り組む体制ができている点が評価できる。指導体制が整った一方で、より意欲的な生徒へ研究環境を確保する必要が生じている。今後は、課題研究の内容を深化させ、より先進的な科学技術系人材を育てられるよう、教師の指導力強化とともに課題研究の時間の充実を念頭に置いたカリキュラム等の環境整備が望まれる。</p> <p>○ 課題研究において、生徒自身の進路や地域課題と関連した課題設定がなされるなど良い工夫がされており、課題研究を推進しているように見受けられ評価できる。引き続き生徒の自主性も尊重しつつ実施</p>

		<p>することが望まれる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 大学や自治体、地域の企業などと連携した取組がなされており評価できる。 ○ 多くの生徒が科学コンテストに出場し、各種発表会で成果を発信しており評価できる。今後は研究の質の更なる向上に期待するとともに、卒業生が社会でどのように活躍していくか、調査等により追跡していくことが望まれる。
19	滋賀県立膳所高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ SSH 事業の目的を明確にしており、SSH 推進室を核に全校体制で組織的運営を実現し、学校全体で高いモチベーションを持って SSH 事業に取り組んでおり大変評価できる。 ○ 「探究」「探究 S」での課題設定能力について、校外学習で疑問探索シートを活用した課題発見能力の育成やルーブリックを活用したパフォーマンス評価などで生徒個人、グループの段階的な育成を実現させており大変評価できる。 ○ 国際科学オリンピックなど各種コンテストに多数成果を上げており評価できる。また、理数科生徒だけでなく普通科生徒からも多くのチャレンジが実現していることは評価できる。 ○ 1 学年 11 クラスの大規模校であるが、全学年全生徒が探究的活動に取り組んでおり、夏休みに探究活動を実施する等効率化するための工夫も見られ評価できる。 ○ 2 年生理数科の生徒が取り組む「課題研究」では、多くの教員が指導を行うにも関わらずグループ数が決められているので、生徒が主体的に設定したテーマを生かして探究が行うことができるよう柔軟に対応することが望まれる。
20	奈良県立青翔高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 事業を実施すること自体が先行していて、目的に沿った生徒の変容をもたらす形での事業実施とはなっていないように見受けられるため、今後、学校が SSH 事業を通して育成したい人材像を明確にし事業の実施形態を改善することが望まれる。 ○ 課題研究が、教師の指導のしやすさを優先するあまり生徒の主体性や意欲を十分に尊重するものとはなっていないように見受けられるため、特にテーマ設定の部分で、生徒の主体性を十分に育むための改善が望まれる。

		<ul style="list-style-type: none"> ○ 課題研究を高校1年から3年までの3年間同じテーマでグループ研究を行うことの是非について、評価・検証していくことが望まれる。また、理系大学への入学者の割合が低調であり事業実施の成果に課題がある。 ○ 県内SSH指定校との交流・協力体制をつくり、近畿圏の数校のSSH指定を含め、共同でポスター発表会を実施している点は評価できる。 ○ 課題研究については、「スーパー探究科学」として各学年2単位計6単位の設置、「ノーベルノート」を用いた教師と生徒のやりとりの記録、「スーパー探究科学参考資料」の活用等の取組により、研究の質を高めようとしている点は評価できる。
21	学校法人ノートルダム清心学園 清心中学校清心女子高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ 課題研究の指導を理数系の教師のみでなく全教科の教師が参加できる工夫をすることで、更に教師の意欲を向上させ組織的に事業を実施していく事が望まれる。 ○ 英語の学習及び部活動は熱心に取り組まれて、各種コンテストで成果をあげており評価できる。 ○ SSH主対象の「生命科学コース」の生徒自体が少人数であり、「文理コース」からのSSH参加の生徒も少数であることから、成果の普及の観点からも、規模を拡大し、効果的な取組を横展開していくことが考えられる。 ○ 理科の中でも生物に重点を置いた教育を行っているように見受けられるが、各個人の興味や学力に合わせた教育をすることによって、生物以外の分野でも突出した生徒を育成していくことが望まれる。 ○ 「SSH科学課題研究」などの履修する生徒が少ない科目について、専門的な部分を外部人材に任せているようにも見受けられる。本来教師が指導や支援を行うべきことと外部人材の役割等を整理して研究を進めることが望まれる。
22	福岡県立香住丘高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○ SSH事業の目標が、SSH事業の目的及び設定課題に対して適切かつ具体的に設定されており、それに沿った事業実施が着実かつ効果的に進められており大変評価できる。 ○ 課題研究以外の授業においても指導方法の十分な研究が行われており、生徒に教えるだけではなく、生徒に問うことにより、生徒自身

		<p>が自分の研究として自分で調べ、自分で実施し、自分でまとめることに成功しており、その結果として生徒が課題研究においても大変主体的かつ意欲的に取り組み、能力の育成や研究成果の両方で高い成果をあげており大変評価できる。また、生徒が主体的に活動していることで、教師の負担が過大になることなく、高いレベルの指導ができるシステムとなっている点も評価できる。</p> <p>○ 評価法（ルーブリック）の開発とともに、「コーチング」の手法や「問い」による対話を重視されていることに大きな可能性が感じられる。それらを、指導と評価の方法として整理・一般化していくことが望まれる。新任教員への研修としてや他校への波及効果として貴重なものになると思われる。</p> <p>○ 数理コミュニケーションコース「SS科学探究」（3年間5単位）、普通科「SS総合科学探究」（2年間2単位）において全校生徒対象に課題研究を実施する体制が確立しており、3年までに全生徒が論文作成を行っていることは評価できる。また、本取組を通じた指導と評価を一体とした更なる授業改善も望まれる。また、発表数や受賞数の増加が見られ、望ましい方向へ進んでいるように見受けられ、今後更に課題研究の質的な部分（仮説の設定、結果の分析・解釈、成果の応用・社会貢献など）についても分析・実践を進めることが望まれる。</p> <p>○ 九州大学、山口大学、九州工業大学、福岡女子大学との連携講座・研修を実施、福岡県 SSH 指定校6校とコンソーシアムを組織して情報交換、近隣校と連携した取組など、活発な外部連携が実施されており評価できる。</p>
23	熊本県立熊本北高等学校	<p>○ 1年学校設定科目「アクティブリサーチⅠ」で全生徒対象の探究学習の実施や「アクティブリサーチⅡ」で熊本地震をきっかけとした課題研究に地歴公民の教師が加わるなど全校体制の指導が確立されつつあることは評価できる。</p> <p>○ 2年普通科 SSH クラス（FSC）での「アクティブリサーチ」（2単位）、それ以外の理系クラスでの「数理探究」（2単位）の設置は評価できる。今後は、3年普通科での探究的な学習の設置についての工夫が望まれる。</p> <p>○ 数理探究などの課題研究にふさわしい独自の教材開発を含め、組織的な指導力向上のシステム構築と効果の検証を一層図ることが望まれる。</p> <p>○ 指定第2期目の課題として課題解決能力の検証などを挙げている</p>

		<p>が、具体的な方策が認められないように見受けられるため、今後更なる改善が望まれる。</p> <p>○ ルーブリックの研修は進んでいるように見受けられるが、SSH 事業を通じて育成を目指す「課題解決能力」「探究力」「語学力」「コミュニケーション力」「多面的思考力」について教師が評価するルーブリックを確立させ、教師側からの評価をしっかりと実施することが望まれる。</p>
24	大分県立日田高等学校	<p>○ 「発問の工夫」など日田高アクティブラーニング5項目（AL5）を活用した授業改善を具体的に取り組んでいることは評価できる。</p> <p>○ 生徒の課題研究の総数は、指定第1期目の60件から指定第2期目の162件に拡大されていることから、今後とも、学校として組織的、計画的な取り組みをすすめ、生徒や教師の負担とならないように、時間増もなく、しっかりポイントを伝えるための研修会を設けるなどの取組を一層計画的に進めることが望まれる。</p> <p>○ 課題研究を核とした学校設定科目「SS 探究」を全生徒対象に設定されていることは評価できる。今後は、育成すべき生徒像を明確させ、「探究基礎Ⅰ、Ⅱ」「探究Ⅰ、Ⅱ」「Water Science」などの各科目との関係を整理することが望まれる。</p> <p>○ 授業改善や教材開発について、実施することによってSSHのねらいがどの程度実現できたのかをみる事後評価を行うことが望まれる。また、国際科学オリンピックに数学や生物分野でチャレンジする生徒が一定数いることは評価できる。今後、物理、化学分野などに広げることが望まれる。</p> <p>○ 成果の分析として、メタ認知として、課題意識をもつこと、図表表現の重視、議論の重視、予想重視、授業の目的理解、理由考察の重視に着目して生徒の変容の違いを分析し、改善する評価法を確立しようとしている点は評価できる。一方で、現在行っている生徒へのアンケート結果の分析に加え、仮説に沿った客観的な評価も行えるよう、学校が目指すSSHの資質・能力について、複数の教師が客観的に評価できるルーブリックを開発することが望まれる。</p>